



BSR 通信

BSR 推進室ニューズレター第 20 号

平成 27 年 11 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室

〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1

03-5394-3079 (直通)

bsr_lab@mail.tais.ac.jp

仏教研修の意義

仏教学部 仏教学科

特任専任講師 木内 堯大

「大正大学とはどのような大学なんですか？」

「仏教系の大学です。」

「それでは仏教の勉強や修行体験などもするんですか？」

「いいえ、仏教学部ではないので……」

大正大学の学生であれば、日常生活や就職面接などで、一度は経験したことがある会話かもしれない。実際に仏教にほとんど触れることなく卒業していく学生も多いのではないだろうか。

仏教学部では、夏休み期間中に全ての学生を対象にして、仏教研修という集中講義を 3 講座開いている。それぞれ、各地の寺院に出向き、教室では得られない仏教の教えを直接体験しようという趣旨で行われている。

その中でも、私が担当しているのは、天台宗の総本山、比叡山延暦寺の居士林という道場で行われる 3 泊 4 日の研修である。

研修の主な内容は、山内の参拝、講話、坐禅止観、写経、回峰行などである。特に回峰行は本講座の中心であり、夜中の 3 時に居士林を出発し、回峰行者が歩く山道を進み、山麓の坂本の町まで降り、再び居士林まで登る 30 キロ近くの行程となっている。もちろん、この研修は日常生活に関しても制約が多い。食事の最後には、食器をお茶で洗淨して飲み干さなければならないし、食事中には、話し声はもちろんのこと、一切の音を立ててはならない。携帯電話は預けてしまっているので、外の情報は一切入ってこないし、ツールを介さずコミュニケー

ションを取らなければならないのである。

ところが不思議なもので、学生は不自由な環境を新鮮な気持ちで楽しんでる。その順応力や好奇心にむしろこちらが驚かされるのである。

学生達は、比叡山という空間で無ければ得られない何かを得られたのではないだろうか。

そして、彼らが仏教系の大学に学んだことの意義とその強みを、この研修の体験を通じて感じ取ってくれたら幸いである。



目次

1 頁：巻頭言

2 頁～3 頁：研究ノート I・II

4 頁：BSR 図書室・今後の予定

研究ノート I

多死社会における BSR

— 科研研究会報告② —

10月27日、BSR推進室が主体的にかかわる科学研究費研究「多死社会における仏教者の社会的責任」（代表者：林田康順先生）の研究會が開催されました。

前回（BSR通信Vol.17、9月号で報告）は、訪問看護の専門家を招き、訪問看護の現状と展望、およびそこで期待される仏教者の役割について学びましたが、今回は医療からの見解を、ということで、東京大学医学部精神科助教であり、認知症を専門とする医師・岡村毅（おかむら つよし）氏を招き、研究會を開催いたしました。

コミュニティケアのリーダーに

岡村氏からは、これまでの臨床や研究での経験から仏教者（僧侶）に期待することを提言していただきました。

2055年には高齢化率（65歳以上の全人口に占める割合）が40%を超えるとされる日本では、今後、認知症患者が増大することが見込まれており、10人に1人が認知症の時代になるとも言われます。そうなれば、医療施設・介護施設の供給はおいつかなくなりますから、認知症患者とその家族を地域コミュニティが支えていく必要がでてきます。医療中心ではなく、いつまでも住み慣れた地域で最期まで暮らすこと



を目指す「地域包括ケア」が推進され、認知症患者に対しても入院や施設入所より、自宅にいながら訪問診療・訪問介護を利用してもらおうという国家戦略がたてられています。

こうした動向をふまえて、今後のケアを考えた場合、地域で信頼をえている人物がその中心となり、ケアリーダーとなっていくことが望ましい。それを仏教者が担ってくれないだろうかという岡村氏は述べます。

また、認知症ケアにおいても、寺院という空間や伝統儀礼が有効に機能する可能性が指摘されました。岡村氏は、従来の論理に従ったケアだけではなく、身体記憶に根差したケアがあってもよいのではないだろうか、「お寺でお勤め」、「写経」、「瞑想」、「読経」、「和尚さんが言うから仕方なくボール遊びをする」などのデイケアプログラム案を例示しました。現在、イギリスで農業を通じた認知症ケアの研究が行なわれるなど、認知症ケアのイノベーションがおこっています。寺院を使ったケアという発想も、世界的潮流と軌を一にしているのかもしれない。

終末期ケアへのさらなる関与

医療技術が進んだ結果、人はなかなか死ねない時代になりました。医療現場では、生命維持を最優先で考え、胃瘻や点滴を行ない、それがかえってQOL（クオリティ・オブ・ライフ）を損なってしまうという皮肉な状況も生まれてきました。しかし、現状への反省から、本人が望んでいる、家族が話し合った結果であるといった場合には、望まれていない延命措置はおこなわなくても良いという医療ガイドラインが作られもしています。こうした問題に、伝統的に生死にの問題をあつかってきた宗教者が

より深く関わって欲しいという意見が岡村氏から出ました。

「いのち」といった時、「生物学的ないのち＝生命」と「物語られるいのち＝人生」があり、前者は医療の守備範囲、後者が宗教や哲学の領域に分けられるでしょう。今までは前者の「いのち」が全体かのような錯誤があったがために、過度な生命維持、QOLの減退という事態が生じてしまったのかもしれませんが。いかに死ぬかということは、いかに生きるかということとイコールであり、それはただ命を永らえさせれば良いということではないわけです。医療の専門家である岡村氏からこうした意見をうかがい、今、臨床宗教師やスピリチュアルケア師の養成が始っていますが、宗教界全体が意識を高めていく必要があるように感じました。



社会を変革する力を

上述の観点と重なりますが、岡村氏は、「よりよい社会とは何か」という議論を宗教者から社会に積極的に発してほしいと期待を込めて要望されました。コミュニティケア、地域包括ケアを声高に叫んだとしても、私たちの価値観、地域づくりの視点が従来通りでは、現実には追いつかなくなってしまいます。よりよく生き・死ぬためには、社会の価値観を転換していく必要があるでしょう。その資源を私たち仏教者は持っていることを自覚することがまずは大切なのだと思います。（〇）

研究ノートⅡ

仏教新潮流

—若手僧侶と超宗派③—

BSR 通信 18 号では、この若手・超宗派の僧侶による活動を発信系と実践系に分類し、発信系の一例としてインターネット寺院「彼岸寺」を紹介しました。今回は、実践系の例として全日本仏教青年会（以下、全日仏青）の活動を紹介します。

「臨床」への取り組み

BSR 通信では第 3 号から第 7 号にかけて、「臨床宗教師」（東北大学大学院実践宗教学寄附講座）、「スピリチュアルケア師」（日本スピリチュアルケア学会）「臨床仏教師」（臨床仏教研究所）などの宗教や宗派を超えた取り組みを紹介しました（カッコ内は主催団体）。

現在では、各コースを修了した僧侶が、病院と協力して緩和ケア病棟で相談カフェをひらくなど各地で実践の場ができています。

このような、「臨床」の現場に積極的にかかわっていかうとする動きは、ついに若手僧侶の全国組織である全日仏青の活動の柱としても取り上げられることになりました。

全日本仏教青年会の新たな取り組み

全日仏青は、1997 年に設立された、日本全国の宗派・地域の垣根をこえて活動する仏教青年団体で、9 宗



派の全国青年会と 4 地域の仏教青年会が参加・加盟しています。

この全日仏青には、国際委員会、諸宗教対話委員会、救援委員会など国際交流、宗教間対話、社会貢献に向けた作業部会があります。各々の委員会は、研修会や交流会などを企画・実施し、若手僧侶同士の交流促進だけでなく、各自の僧侶としての資質向上にも寄与する活動を行っています。

全日仏青救援委員会では、昨今の「臨床」への僧侶の意識の高さを受けとめ 10 月 15 日、東京グランドホテルを会場に研修会を開催しました。

第 1 回安寧僧養成講座

「安寧僧養成講座」と名付けられたこの研修会は、苦しみ現場に寄り添い、人々の心の安寧に寄与するための僧としての心構えを身につけるという目的で、おもに死別ケアをその基本としています。

死別は僧侶が日常の法務を通じて最も接しやすい「苦の現場」です。ここには「臨床」は何も寺院の外にのみあるわけではなく、日常の法務そのものが「臨床」であるという認識にもとづいています。こういった、足元を大事にするという姿勢は BSR の基本的理念にも合致するものといえます。

講師には、グリーフケアに取り組む団体、リヴオン代表の尾角光美氏を招きましたが、講師に僧侶ではなく、一般の

方を招いたということも、僧俗の垣根を超えようという意図がうかがえます。

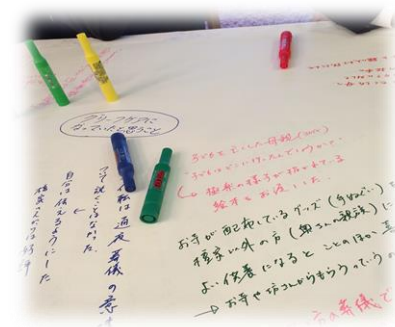
講義・ワークショップ・ロールプレイ

宗派を超えて集った 27 名の受講者は、まず尾角氏よりグリーフとは何かについて講義を受けたのち、グループに分かれ「お寺とグリーフケア」についてワークショップ形式で意見を出し合いました。

さらに、遺族役と僧侶役に分かれたロールプレイを行い、僧侶役のどんな言葉に傷ついたか、どんな言葉に癒されたか、また、遺族役のどのような問いに言葉が詰まったかなど、意見交換を行いました。普段、「僧侶」でしかない参加者にとっては、実際に体験することで「遺族の思い」へ想像力を働かせ、そこから自身の行動を振り返るという深い学びの場となったようです。

わずか半日の研修会ゆえ、「臨床宗教師」や「臨床仏教師」とは違い、得られたものは「心構え」程度の知識と技術に過ぎないかもしれません。しかし、こういった取り組みが最大の超宗派組織・全日仏青でも行われはじめたことは注目に値します。なお、第 2 回の安寧僧養成講座は来年、関西を会場に開催される予定です。

若手・超宗派僧侶の活動は、個人が ICT (Information & Communication Technology) を活用して発信・実践を行うだけでなく、組織としても実践活動の展開がみられる時期をむかえているといえるでしょう。(T)



BSR 図書室

小林正弥監修、藤丸智雄編

本願寺白熱教室 お坊さんは社会で何をするのか？

(法蔵館 2015 年、1400 円+税)

5 人の命を助けるために、1 人の命を犠牲にすることは正しいか？数年前、アメリカの政治哲学者・マイケル・サンデルがおこなった「ハーバード白熱教室」を覚えている方も多いかもしれません。本書は、この白熱教室をモチーフに、2013 年 9 月に本願寺聞法会館で行われた「本願寺白熱教室」をベース（第 0 章）に、8 編の論考をくわえた一冊です。

第 0 章の「本願寺白熱教室」では、「自然災害と宗教」をテーマにいくつかのジレンマが投げかけられ、僧侶たちが自由闊達な議論を交わしています。たとえば、「遠くの地で大規模な自然災害が起こったら、お寺を離れても救援活動へ行くべきか？」「亡くなった人のために葬儀をしてほしい、でも宗派色を出さないで、と言われたら？」「震災後、政府の原発再稼働に対して政治的発言を行うか？」など、檀信徒と社会貢献、宗教と公共空間、宗教と政治などのジレンマを突き付けられます。さらには、「宗派の立場と相いれない活動



に対して、本山から自粛するように言われたら？」という、組織と個とのジレンマなども問われます。

自分たちは何を信じて進めばよいのか…。「教室」に参加した 40 名の僧侶は、ジレンマに向き合うとき、原始仏教経典を引くもの、親鸞の言葉を頼りにするもの、「僧侶」であることをよりどころとするものとさまざまな姿勢を示しますが、いずれも小手先の技術でかわそうとするのではなく、体当たりでぶつかろうという姿勢に心を惹かれます。つづく 8 編の論考については、またあらためて紹介したいと思います。いずれも読みごたえのある章となっています。

宗教と世俗の駆け引き、バランスがさまざまな場面で問われる昨今ですが、仏教界からこのような企画が生まれ、また議論がなされたということは特筆すべきでしょう。(T)

今後の予定

11 月 14 日 (土)	11 時～12 時 13 時～15 時	花会式 (真言宗豊山派) お坊さんカフェ「僧話花」	鴨台観音堂前 5 号館 1 階
12 月 19 日 (土)	11 時～12 時 9 時～13 時 13 時～15 時 15 時	花会式 (天台宗) あさ市 お坊さんカフェ「僧話花」 天台声明公演	鴨台観音堂前 南門 けやき広場 5 号館 1 階 礼拝堂



すがも中山道菊まつり(11月4日～14日)
大正大学キャンパスを会場に開催中!



巻頭言執筆者 紹介

木内 堯大 (きうち ぎょうだい)

大正大学 仏教学部 特任専任講師

早稲田大学 第一文学部卒業

大正大学大学院 文学研究科 仏教学 (天台学) 専攻

博士課程 単位取得満期退学

平成 20 年に博士 (仏教学) の学位を取得

専門は、天台学・天台宗の儀礼と文化